



かみせや

横浜市立上瀬谷小学校 学校だより

令和8年8月31日

地域版

9月号



㊦感じる心たいせつに ㊦みんなの心、みとめあい ㊦せいっぱい ㊦やってみよう やりとげよう

脳みそに汗を

校長 小林 京子

例年より少しだけ長い40日の夏休みが明けました。連日、各地からの震災や大雨の被害報告が絶えない夏でもあったように思います。ご関係の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

久しぶりに子どもたちの顔を見ると、子どもたちの顔がこれまでと「何か」違うように感じるのは、私だけでなく、教師という仕事をしていると皆が感じるのだと思います。その「何か」は、身長が伸びた、日に焼けたというような見た目でははっきりとわかるものではなく、夏の間に子どもたちが体験したことを通して成長したからだろうなあ、というのが私の感覚です。その「何か」とは、子どもの成熟であり、それは、表情の変化、雰囲気の変化というようなものです。表情が深くなる、声の厚みが変わる、身動きが変わる、ともいえるでしょうか。ものさしで測ることができる量的な変化ではありません。

学校はこの節目に「学校の役割とは何か」を考えます。さまざまな経験を経て成熟、複雑化した子どもたちが、40日ぶりに集団で学ぶことの意義、学校ならではの良さを感じてほしいと思います。まもなく教室では互いの顔を見ながら、夏休みの話をしたり聴いたり、9月からの学習内容や行事の見通しをもったりすることでしょう。AIによる効率のよい一人学びもこれからの時代は、選択肢の一つとして考えられます。調べ物は、図鑑や百科事典を開くことよりスマートフォンで調べれば早く解決する、読書感想文もAIが参考例を教えてくれる、夏休みにひたすら自学ノートに漢字を書いていると『どうせ、漢字なんか書けなくても入力すれば漢字が出てくるから』という気持ちにもなる、そんな時代でもあります。AIやスマートフォンはうまく利用すれば大変便利で良いものです。ただ、私が小学校の学びの中で子どもたちに身に付けさせたいことは、どちらかというと時間がかかること、手間がかかること、面倒なことが多いかもしれません。一方で、脳が活発に細胞分裂を起こしているこの時期に子どもたちを「複雑化」させることがとても重要だと考えるのです。脳みそに汗をかかせたいのです。

一例として、手書きについてです。ある研究から「子どもの文字を書く力の低下は、後々の文章作成能力にも大きな影響を与える」という分析結果が明らかになっているそうです。実際、この時期にそれを怠った大学生は、文章を作成することに困難をきたしているのだと。得意不得意、できない話ではなく、小学生が手書きや漢字練習を通してそれを覚える過程が脳に大事な刺激を送っているということなのです。さらには「手書きの遅さは、考える時間を生む。紙に書く手ごたえは実感を与える。書かれた文字にはその人らしさが表れる。身体性を伴う経験が思考活動の下地になる」のだということです。本校では、字を「濃く、大きく、はっきりと」書くように日頃から指導していますが、まさに意味としてはそういうことです。筆箱の鉛筆をしっかりとけずってから、学習をするという姿勢は大事なことだと考えています。

話合いを通して人の意見を聞いて解決すること、本を読んで想像したり考えたりすること、脳みそに汗をかき、少し遠回りに感じることを学校では大事にしていきたい、と思っています。